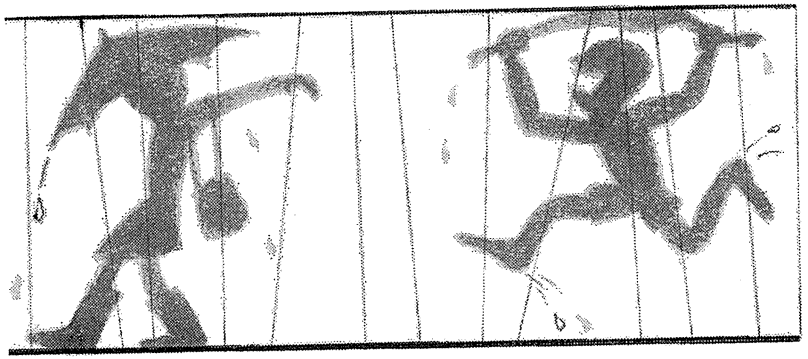
学校　地域社会



文部時報

昭和六十三年六月
第一三三七号

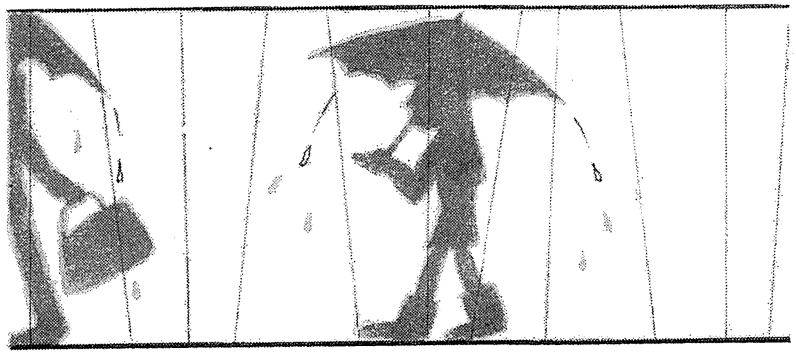
特集　文化庁二〇年

◇巻頭論文
二一世紀の文化行政……文部大臣　中島源太郎…4

◇座談会
地域社会と地域文化の新展開……8
（出席者）小笠原　暁／辻村　明／松山　樹子
光岡　明／（司会）横瀬　庄次

◇論文
これからの芸術文化行政に期待するもの……丹羽　正明…26
文化財保護行政への期待……林屋辰三郎…30

手をつなごう　家庭



◇随想
文化庁二〇周年に寄せて……加藤　衛…34
拍手……観世　元正…35

◇資料
我が国の文化と文化行政（要約）……文化庁長官官房総務課…36

◎教育改革トピックス
大学審議会の審議状況……高等教育局企画課大学審議会室…87

◎文部省のまど
保健体育審議会へ諮問　体育局体育課…89
昭和六三年度私立高等学校等入学者に係る初年度納付金に関する調査結果の概要　高等教育局私学部私学助成課…91
昭和六三年三月高等学校卒業者の就職状況に関する調査について　初等中等教育局職業教育課…93

◎文化財紹介
織田信長自筆書状　十月二日　長岡与一郎宛　（高橋　裕次）

◎名作シリーズ
夜雨宮詣美人　鈴木春信画　（解説　大久保純一…25）

表紙　宮沢　美紀／カット　赤羽根秀一

座談会 地域社会と地域文化の新展開

出席者（敬称略・発言順）

小笠原　暁
（芦屋大学教授）

辻村　明
（静岡県立大学副学長）

松山樹子
（（社）日本バレエ協会専務理事）

光岡　明
（熊本近代文学館長）

＜司会＞
横瀬庄次
（文化庁次長）

小笠原　暁氏

辻村　明氏

文化の時代、地方の時代

横瀬（司会）本日はお忙しいところをお集まりいただきまして、ありがとうございました。本年の六月一五日に文化庁が創立されて満二〇年を迎えます。

発足当初の昭和四三年を振り返りますと、その後の文化あるいは社会の状況には変遷著しいものがありますが、その中で特に最近目覚ましい展開を遂げつつあるのが、地域社会における文化ということだと思います。

本日は「地域社会と地域文化の新展開」と題して、その現状とそれに対する期待、さらには文化庁へのご注文やご要望について、お話し合いをお願いします。

最初に全体的な概況について申し上げますが、文化庁が発足した昭和四〇年代は、臨教審流に言えば、ちょうど我が国が欧米への追い付き型近代化の時代を終わり、社会の構造変革が行われて新しい時代に入ったと言うことになりますが、要すれば、経済的、物的な豊かさの充足と自由時間の増大が主な基盤になって、生活の質的な向上やゆとり、心の豊かさなどを求める傾向が非常に濃くなってきたというのが現在の時代ではないかと思います。

こうした動向は、地域における住民の要望という形に表れますし、それを地方の行政が受け止めることになりますが、地方の生活や行政の中では、非常に顕著な変化が起こっているのだろうと思います。最近の地域文化の展開は、地方がそれぞれ特色や個性を生かして発展を目指すという動向の中の一番典型的なものだろうと考えております。

昭和五〇年代の中ごろの五四年に、「地方の時代」と言われ、また、同じころに文化的な充足を求めようという傾向を、「文化の時代」ということで表現されています。地方がそれぞれの個性や特色を主張して、地方ごとに国民の要望にこたえるという方向を示した

松山　樹子氏

光岡　明氏

横瀬文化庁次長

のが地方の時代ということだと思います。どちらを主語にするかで意味が若干変わりますが、「地方における文化の時代」あるいは「文化の中の地方の時代」、どちらでもよろしゅうございますけれども、最近特にお感じになったことをお話しいただきたいと思うわけでございます。

皮切りに、兵庫県の教育長、さらには副知事として地方における文化の振興に携われた小笠原先生からお願いします。

小笠原　私は、行政をしばらくやっておりましたが、いろいろな意味でいわゆる箱物がずいぶん増えたという感じがするわけですね。だんだん豊かになってきて、住民の間から体育館やホールを造ってほしいという要望が多くなり、いまどこの地方に行っても体育館や町民文化会館とか市民ホールとかが、かなりできてきている。ヨーロッパの地域を見ても、これだけ文化施設を持っている国はないと思うんですね。

ただ、問題は箱物だけはできたけれども、中のソフトはまだ貧弱だと言うことです。にもかかわらず鑑賞する文化から参加する文化へという動きは、非常に顕著に表れてきて、合唱団とか自分たちでオペラをやろうという動きが出てきています。私のいる兵庫県の伊丹にも市民オペラなどができております。それから、夜、バーなどに音楽好きが集まって、いろいろな楽器を持ち込んで、みんなでジャム・セッションをやったりする。こういう動きがかなりこのごろ顕著に出てきたように思うわけです。

問題は、そういういろいろな文化活動があるんですけれども、その情報のネットワークが比較的うまくいっていないと言うことです。例えば、行政について言いますと、町なり市なりは自分の区域の中で行われていることに関しては、広報紙か何かで宣伝しますけれども、隣町のことは全然書かない。ところが文化には市の境とか町の境とかはないのですから、隣の町のことも書いてもいいのだろうと思うんですけれども、意外と書いてない。せっかくいい催しが近所にあっても全然知らないというケースが、最近目立つような気がしますね。

また、今本物の文化を鑑賞したい、あるいはそういうものにふれながら、自分たちもやってみたいという傾向は、非常に強くなってきたと思いますね。長寿社会になって、しかも余暇時間が長くなってきた。豊かになってゆとりが出てきた。その中から何かそういう趣味なり生きがいなりを見つけていこうという傾向は非常に強いなと思いますね。

横瀬　ありがとうございました。それでは、大衆社会、地域社会に強い関心を持って研究を続けてこられた辻村先生、いかがですか。

辻村　確かに、経済が充実したので文化へという動きがあるわけですけれども、それ以上に東京の生活が適正規模を欠いている。過密都市でロスが多すぎて、文化を創造する場所ではなくなっています。そういうことから四全総の計画にもありましたように、地方に分散する必要があるんだということを、私は特に感じますね。私など東京時代には学生とよく飲んでましたけれども、終電車が常に気になっていました。それが静岡ではまず終電を気にしなくてもいいですし、看板まで飲んでいてもタクシー代千円程度で帰れるわけです。ですから、時間的にも経済的にも、いかに東京がロスが多い地域であるかということを、痛切に感じております。

二番目に、ハイテクということでテクノロジーが進めば進むほど、全国の部分と部分とが全部ネットワークに組み入れられてしまいます。ですから、東京で何か事故があれば全国がパンクしてしまう。地方のローカルな問題も東京に全部影響してしまう。そういう時代になっておりますので、東京一極集中というのは非常に危険であるということを感じます。

三番目に、世界的に展望しますと、先進国というのは大体首府以外に有力な地方都市があるわけですね。そこは必ずしも人口が多いということではなくて、有力な大学、有力なオーケストラ、有力な美術館があるということですね。経済的には確かに日本は先進国入りして大国になったわけですけれども、名実ともに先進国になるためには、地方分散に移行しなければならないというふうに感ずるんです。

この三つの理由から私は地方分散、地方の活性化ということが、非常に必要であると考えています。

それでは地方分散がどうすれば可能になるかという点で、特に文化に重点を置いているのが私の持論です。なぜかといいますと、文化というものはオリジナルが一つしかないという性格がありますので、その一つしかないものがある地方の都市にあれば、それは絶対に東京にはありませんし、ほかの都市にもないということになるわけですね。文明とかテクノロジーレベルのものですと、多少進んでいるかどうかという量のレベルでの比較となり、絶対的にあるか、ないかという質的な相異にはなりません。それが文化ということになりますと、あるか、ないかということになります。

後ほどお話ししますけれども、例えば、我が静岡県の三保の松原に「羽衣の松」というのがありますけれども、松というのは日本全国いたる所にありますね。しかし、羽衣伝説がからむことによって、それは文化になるわけで、羽衣の松というのは一本しかないということになります。ですから、本当に地方の独自性を打ち出していくためには、文化しかないのではないかというのが、私の考え方なんです。

横瀬　ありがとうございました。それでは、長らくバレエの第一線で活躍され、現在も後進の指導をはじめ幅広い活動をされている松山先生、お願いします。

松山　私たちの仕事は、バレエという小さな枠の中でのことで、なかなか外とのつながりはございません。ですから、バレエの舞台とか地方での講演を通して地方の文化とか、その土地にふれるわけですけれども、いつも思うことは、私は女性ですから、すぐ世界的な流行のファッショナブルな建物とか着物を見るのですが、そのようなものは東京より早いのですね。東京のほうがずっと遅れているし、地方のほうがずっと進んでいます。

それでは、お客さんの反応はどうか。いい悪いは拍手でわかるのですけれども、東京の人よりはるかに正直なんですね。

また、例えば、最近はコンクールなんかを、あちこちでやっております。そういうところで入賞するのは、ほとんど地方の人なんです。当バレエ団にも、いろいろ勉強したいという方が、集まってきますけど、東京に生まれた人たちよりはるかに地方の方がうまいんです。バレエに対して、より真剣なんですね。大変な生活の中から、自分たちはやらなければということが根に付いているという感

じで、いつもそれには感心してしまうんです。昔から地方の人たちの熱とか心とかが、バレエに対する進歩につながっていたのではないかと思います。NHKのようなマスメディアでも、今年は三か月にわたってバレエの基本を見せてくれるような時代になりまして、私たちも大変底辺が広がってきていると感じます。

横瀬　最後に、熊本県の近代文学館長として地域の文化活動の振興に深くかかわるとともに、鋭くその状況をみつめてこられた光岡先生、いかがですか。

光岡　この中では、私が東京から一番遠い所に住んでいます。地方らしい地方に住んでいるわけですけれども、私は地方の時代というものに、新しい自覚が伴ってきているような感じがします。

さらに今、辻村先生が言われたように、東京一極集中に対する批判というものが、地方の時代を押し上げていると思います。ただ、豊かな社会になって、人間の価値観がばらばらになってきているということがあると思うのです。だから、そういうものを地域でまとめようという感じが、今、出てきています。

つまり、ばらばらになって孤立化した個人を、地域でまとめられるのではないかという地域の帰属意識を持とうとしている時代だろうという感じがします。

その具体的な表れが、いわゆる町づくり、村おこしであり、地方における文化の見直し、歴史と伝統の確認だと思うんです。実は、こういう地域の潜在的な可能性を、掘り起こすという動き自体は、確言はできませんけれども、現代文明、技術文明を問い直すという重大な訂正運動になる可能性があると私は思っております。今までは経済価値とか、市場原理とか、効率とか、組織とか、機能とかプロフェッショナルとかいったもので、社会が動いてきたんだと思うんですけれども、地方に住んでいますとそれに対して緑とか水とか土あるいは環境とか福祉とか教育、それからアメニティーとか安全食品とか老人とか、大きくは平和ということでしょうけれども、生活優先といいますか、生命優先の時代になってきていると感じます。私はそれを「命が先だよ、皆の衆」ということばで、呼んでおります。

それから、熊本はもちろんですけれども、今盛んに全国で町づくり、村おこしをしております。それに役場とか議会だけじゃなくて、若者の組織とか職能の集団あるいは文化人の組織が積極的に参加してきている。こういう地方の時代というのが、ひょっとすると草の根民主主義の第一歩を作るのかなという感じを持っております。

地域の伝統文化と町づくり、村おこし

横瀬　どうもありがとうございました。四人の先生から、それぞれ文化の時代、地方の時代のいろいろな面を出していただいたように思います。そう言われれば、松山先生は東京ですけれども、あとの三人の方は、それぞれ兵庫、静岡、熊本に住まれて生活していらっしゃるわけですので、地域文化について、お国自慢の見地からも、ぜひいろいろお話しいただきたいと思います。

文化というものは、当然それ自体いくつかの方向に発展しようとする性質を持っていると思いますが、私なりに分けてみますと、一つは、個性とか地方色とかを求めること。特色をそれぞれの地域で出していくということですね。二番目は、非常に多彩、多様な文化に質的に広げていこうという方向です。三番目は、多くの住民が広範に文化に参加していくという量的な方向です。四番目は、それぞれの文化活動を質的に高めていこうという方向ですね。いわばスポーツの「より遠く　より速く　より高く」というのと大体似たようなものです。

一つの文化活動は、それぞれこの四方向を皆持っていると思いますけれども、ある程度重点づけて、地域文化の新展開ということで皆さんが感じられたことを、できるだけ具体的な例を挙げて、いろいろご紹介いただければ、というふうに思う次第でございます。

まず、町づくりとか村おこし運動の核として、地域の伝統文化を活用している例があるわけですけれども、そのようなもので最近新しい方向が出ているというようなことがございましたら、挙げていただけたらと思います。

小笠原　二つ動きがあると思うんですね。一つは、その地域の人たちが、自分たちの祖先から受け継いできた文化や民俗芸能といったものに対しての認識が、一時のキャッチアップの時代とはかなり違ってきたと言うことです。そのころはともかく忙しい忙しいというので、例えば東京浅草の三社のおみこしでもトラックに乗せて運ぶなんていう時代があったんですけれども、このごろの三社祭になりますと、ずいぶんみんなが参加するようになっているんですね。だから、確かにそういう見直しで、せっかく自分たちは、こういいものを持っているじゃないか、それをもう一回ちゃんとやっていこうじゃないか、という動きが一つあります。

もう一つは、観光という面を考えて、せっかく持っている優れた文化を、村おこしの一つの核として持ってくる動きがあるわけですね。私は今「日本村おこしセンター」という組織を作りまして、その代表をやっているんですけれども、平家の落人の村である、例えば、宮崎県の椎葉村とか熊本県の五箇荘、それから、四国の徳島県の東祖谷山村、それから、奈良県の十津川村、この四村を集めまして、そこの経済的浮揚を考えています。そういう地域はもともと森林ばかりの所ですから、もともとの文化としては焼畑農業なんていう、かなりおもしろいものを持っているんです。あるいは椎葉の稗搗節とか、かなり有名な民謡などがある。ところが、若い人たちはどんどん外に行ってしまって、ひどい過疎になっている。これを何とかしなくちゃいけないということで、古い文化をもう一回掘り起こすという形になってきたわけですね。

経済的な浮揚ということで物産だけを都会に流通させるというだけでは大抵一過性になってしまうわけです。初めに華々しく宣伝したときはたくさん売れるけれども、それだけでおしまいになって、次になるともう数が減ってしまう。そうではなくて、そういった物産と文化とを組み合わせて、物と人と文化、

これを都会と交流しようという動きが、最近出てきているわけです。特に、食文化についてみますと、そういった本当の山の深い所にある村々は、かなりいい材料を持っているわけですね。例えば、お豆腐で言うと、ちゃんと有機農業で作った、山の焼畑で作ったような大豆とかですね。それから水もものすごくいい。あるいはコンニャク芋にしても非常にいいものがあって、おいしいコンニャクができる。あるいはアナゴとかアユとかの川魚にしても、養殖の魚ではなくて天然のものが獲れる。こういう非常に優れた物産を持っているわけです。ただ、それを食文化というところに結び付けるときに、伝統的ないろいろな食べ方があるわけですけれども、それが例えば味が非常に濃いとかで、都会の人には向かない。これを都会の文化とうまく合わせてやろうということをやっているわけです。

例えば、徳島県の東祖谷山でできるそば粉を使って、現地でやっているようなそばとは違った形で調理したらどうなるか。それをいま大阪を中心とした所と、そういった地方の村々と一緒になって物産開発をして、新しい食文化をつくろう。同時に、そういう所の持っている伝統芸能なり歴史なりを、どんどん都会の人に紹介しよう。同時に、都会の人はそういった田舎へ行って、自然の中で伝承された文化を楽しんだり、食品を楽しみながら余暇を過ごす。こういうことをちょっと始めかけているんです。これだけ余暇時間が長くなってきて、いわゆる日常性からの脱却ということが言われると、都会人にそういう地方の持っている文化は、かなり大きな意味を持つだろうというふうに思っておりますけどね。

辻村　先ほどちょっと言いかけました三保の松原の羽衣というのは、羽衣伝説ですから、大昔、まさに風土記の時代からあるんでしょうけれども、五年前に初めて三保の松原で一〇月一〇日に薪能を始めたんです。そして「羽衣」という謡曲をやる。テレビでもちろん「羽衣」は見られるわけですが、これは間接的な接触です。能楽堂に行って「羽衣」を見るのがオリジナルに接触するということになるんですけれども、能楽堂のオリジナルでも、なおかつ背景の松は鏡板という板にかいた松なんですね。三保の薪能はそれとも違い、実際の羽衣の松をバックに、そこで「羽衣」を舞うわけです。これを私はオリジナルのオリジナルだと言ってるわけです。（笑い）これなど伝統文化を活用しながら、同時に絶対に他の地域では演出できない文化をうまく利用して、地域の活性化につなげようという動きであろうと思いますね。

もう一つ、浜松の近くの天竜川の川沿いですけど、磐田市という所があります。ここに六〇〇年前から伝わっている伝説を、「疾風（しっぺい）太郎物語」というミュージカルに仕立て直したという例があります。

どういう伝説かといいますと、六〇〇年前に見付の天神様の森に鬼が巣くっていて村里に出てきては危害を加える。そこで毎年若い

娘さんを人身御供として献上していたというんです。それを通りすがりのお坊さんが、それは非常に気の毒なことだ、何とか鬼を退治したいというわけです。鬼が疾風太郎という犬を非常に怖がっているという噂を聞いて、全国行脚しながら疾風太郎という犬を探して回った。それがいま長野県の駒ヶ根市になっているところの光前寺というお寺に飼われていることを突きとめ、借り出して、その犬を娘さんに扮させて鬼に献上したわけです。大格闘の末、鬼が退治され、それ以来、村里に平和がよみがえってきたという伝説です。

これは考えてみれば日本全国どこにでも転がっているようなありふれた伝説だと思うんですね。ところが磐田の青年会議所の人たちが、青年会議所の何十周年記念か何かで、この伝説を近代的なミュージカルに仕立て直した。これを一般市民にも呼びかけてバックコーラスとしても参加してもらうし、役者としても村人として参加する。さらに、村人役が付ける小道具、例えば、みのなどは磐田の城山中学の三年生の女子生徒の郷土の時間か何かに古老から、みの作りを教わりながら作った一四〇枚のみのを小道具として使ったそうですね。ですから、舞台と客席とがまさに一体となっており、フィナーレではボロボロ涙を流す場面がみられました。これなどどこにも転がっており、忘れられているような伝説でさえも、やりようによっては活性化に持っていける例だと思うんですね。

光岡　熊本にもたくさんあるんですけれども、ちょっとご紹介申し上げます。阿蘇山では春になると野焼きをやりますが、全山燃え上がりまして、見事な光景を呈します。それと阿蘇神社にも昔から伝わっております阿蘇の火振りという神事があります。これは藁の先に火をつけて振り回して秋の豊饒を祈るお祭りですが、それを一緒にして阿蘇の火祭りという行事を阿蘇郡全体で、たくさんの町村が一緒になってやり始めております。それをきっかけに阿蘇町という町がありますが、そこでは、国際リゾートASOという構想ができております。それから地元の一の宮町などが、阿蘇の神々の里という構想を立てております。これは阿蘇神社を中心に伝統と地域おこしを結び付けて動き出そうということです。あるいは熊本の北に菊水町という町があります。そこでは万世の里づくりがなされておりますが、一方では江田船山古墳が存在するわけです。そこで風土記の丘構想を持っておられまして、整備が進んでおりますので、それと菊水町が一体になって古墳祭りを展開しております。これは熊本の三大火祭りの一つに阿蘇神社と並んでなったのですけれども、そこには歴史民俗資料館とか民舞伝習館も作ります。さらに、小規模特産品事業で一九ぐらいの小さな地元の特産品を、一緒におこしています。このように、地域の伝統についての自覚が地域に生まれていると思うんです。しかし、今後の課題としては、どうしても総合調整能力とお金の二つの問題が当面解決しなければならない問題ではないかと思います。

横瀬　伝統的文化の上に新しい西洋文化を取り入れて、新しい我が国の文化をつくっていくことがよく言われますけれども、言葉でいうほど楽なものではないだろうと思うんです。「当麻曼陀羅」のような試みはバレエではずいぶん行われていると思いますけれども、伝統文化と国際的な文化との統合から、新しい我が国の文化ができてくる可能性はどうなんでしょうか。

松山　その可能性はとてもあると思うんですね。クラシックバレエと言うのは世界のどこの国にもあるもので、非常に長い伝統の上に培ったものですから、共通点があるんですね。例えば、去年の九月、奈良でホテルの人に何か催し物がないかと聞きました。そうしたら、ちょうど奈良公園の飛火野の芝生の上で夕方から能があるというんですね。そのときに、それはとてもおもしろいと感じたんです。私は能というと非常に形式ばったものと思っていましたが、その芝生の上の能を見ておりましたら、非常に自由で、外人や小さい子どもなど多種多様なお客さんが、いっぱい集まってくる。そして暗くなってから始める。ギリシャやローマの野外劇場で公演したときのように思えました。

この奈良の芝能をいろいろな角度から鑑賞したのですけれど、楽屋での着替えなんかも見えるような場所があるんですね。それから、後ろのほうの奥には、遅れてくるお客さんが、高い木の繁っている公園の中をぶらぶら通りながら客席に着く。それもまたいいんですね。みんなが自由にパンフレットを見ながら見ている。そのうち狂言がありました。

今度はお面を付けない若い方が、芝生の上なものですから、するする滑っていくのです。その足さばきはすごく軽やかで宙に浮いているような感じなんですね。高齢の有名な方は、私はやはり踊り手なものですから、すぐ立ち居振る舞い、動きを見てしまうのですが、おひざの曲げ方なんかが、よっこらさというような感じなんですけれども、どっしりと土に沈むような形で謡をなさっている。いろいろな形式と様式と今風のものが一緒になって、非常に新鮮な感じを受けたんです。

私たちもクラシックなんて格式張ったものを何十年もやってますと、「こうでなくてはならない」なんていうようなことが時々頭に入ってくるんですね。それで時々つまらない踊りになってしまう。そういう反省をいつも繰り返しながらきましたが、その能を見ましたら、ちょっと解放された感じがしました。例えば、バレエですと、一つの衣裳で二つの性格を自由に表現できるのです。例えば、白鳥の湖の二幕なんかは、白鳥たちが夜になって娘になって解放されて踊って、また白鳥になって帰っていく。白鳥から娘へ、娘から白鳥へと、絵でいったら具象と抽象を、わずかな時間で、すれすれのところでやっている。それがバレエの魅力なんです。新しい「曼陀羅」という作品をやるときにも、その能のことを考え、上演しましたが、この能でとてもおもしろい発見をしたと思いました。

小笠原　私は日本ほど各国のいろいろな文化を集めやすい所はないと思うんですね。食物にしたって世界中の料理が味わえる。そのような所は世界中で日本ぐらいしかないのではないですか。日本料理、中華料理、フランス料理、ドイツ料理、それから東南アジアの料理などですね。同じように芸術・文化の面でも、オペラは楽しめる、中国の京劇がある、バレエがある、あらゆる芸術・文化があります。しかも、外国のかなり優れた芸術家が、どんどん今日本へきてますね。日本はそういうものを全部吸収しながら、新しいいろいろな創作のバレエとかオペラとかの芽が最近ずいぶん伸びてきたという感じがするんですね。関西で、「信太妻（しのだづま）」という葛の葉の狐の話を創作オペラで能の要素とオペラとバレエと、うまいことミックスしてやったんですね。もちろん、バックのコーラスとかオーケストラとかありますけれども、主演は一人なんです。間で同じ人物がパッと変わって、今度はバレエで踊る。これはバレリーナが踊るんですけれども、大変おもしろかったんです。そういうものが日本にできてくるというのは、私は本当にすばらしいなと思うんです。

松山　実験的な試みは随所で本当にたくさんありますからね。勇気を出してやるべきです。

文化イベントの隆盛

横瀬　さっきも申し上げた多彩化という方向に当たるのかと思いますが、文化イベントの隆盛ということがございます。最近、特に地方公共団体が関連してのイベントが花盛りでございます。博覧会などもずいぶん開かれております。文化庁が、おととしから始めました国民文化祭などは、そういう傾向の上に乗ったものなのかもしれません。統計によりますと、地方公共団体が関与したイベントは、一年間に七〇〇〇件といわれておりまして、その中でも文化に関連するのは約三〇％、二〇〇〇件といわれますから、大変たくさん行われているということが言えると思います。こういった傾向について、ご紹介をお願いいただけたらと思います。

辻村　博覧会が各地で花盛りなんですけれども、私はどうも博覧会が嫌いなんです。どうしてかというと、パビリオンを出すのは大体大企業でも決まっているんですね。そうするとハイテクノロジーというのは、さっきも言いましたように普遍的なものですから、どこも同じになっちゃうんですね。最初の大阪の万博とか神戸のポートピア、それから筑波の科学万博までのようにかなり時間を置いてぽつぽつとある段階ならいいのですけど、今はやたらにありますね。そういう意味で私は博覧会ブームにはむしろ否定的な意見を持っているんです。そういうブームではなくて、新しい文化による活性化ということで言うと「浜松フォトニクス」という新しい会社で、光の最先端技術の研究を行ってる会社が脳の中を光の技術を利用して、解剖せずに全部診断できるというブレーンサイエンスの国際シンポジウムを開いたわけです。日米ソという三か国のノーベル賞級の研究者を集めて浜松でそれを開きまして、それが一つのきっかけになって光の最先端の研究所を作るという決議ができたそうです。そうしますと、東京などスキップしてしまって全世界から、光の最先端の研究をする人は、みんな浜松にこなければならないという状況を作り出していこうというんです。実は、浜松フォトニクスの社長は私の中学校の同級生なものですから、よく情報交換をするんですけれども、浜松もぜひ放送大学の受け皿になりたいと言うんですね。ただし、単なる受け皿では満足しないというわけです。むしろ、光の最先端の講義は浜松から発信したいと言うんです。（笑い）ただ、電波を受け取るという、そんな消極的

なことではだめだというわけですね。発信基地として浜松を考えている。

もう一つは、文化という場合、文化の担い手としての大学というものが、大きな役割を果たすはずですから、地方文化の担い手として地方大学が大いに活躍しなければならないと思っております。どうも地方の大学はこれまであまり元気がないんですね。そこで大学を拠点とした新しい地方の活性化ということを、私は考えております。例えば、ドイツでもハイデルベルク大学とかフライブルク大学とかは、人口一〇万とか一五万の小さな田舎町にあるわけですね。そんな田舎町なんだけど、名前が世界にとどろいているというのは、そこに有力な大学があるからだろうと思うんですね。そういう意味で伝統文化ではなくて、新しい文化による活性化の行き方として、大学というものを大いに考えなければいけないのではないかと考えております。

光岡　文化イベントのことで申し上げますと、熊本には実は一五〇〇人ぐらいの文化人が集合した熊本県文化懇話会という相当大きな集団があります。これと熊本県とが組んで、熊本県芸術祭というものをおこしていったということが一つございます。それから、草柳大蔵先生とか梅原猛先生がやっていらっしゃる日本文化デザイン会議が昭和六〇年に開かれて、それを熊本の青年会議所が熊本文化デザイン会議という形で翌年に受け継ぎました。去年が国民文化祭の地方開催の第一回目だったわけですけれども、熊本県が手を挙げまして、「国民文化祭熊本」を行ったんです。それを今度は熊本県民文化祭という形で、今年からまた地方へ展開をしていく。そういう形で、文化イベントを一過性のものに終わらせない努力は、やろうと思えば地方でもできるんです。県民文化祭になったから県内だけということではなくて、国民文化祭のように東京あるいは外国とも十分交流をするような文化祭へ大きく展開をしていき継続させる。それがイベントをやる場合に一番大事なことではないかと思っております。

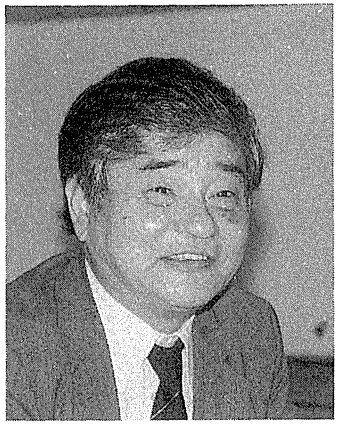
小笠原　私はイベントには二つの意味があると思うんですね。一つは、そのイベントを中心として地域社会あるいは違った地域の人と人とか、あるいは文化と文化とが、そこでつながって交流ができる場である。もう一つは、そこでそういうことが行われているということが、一つの情報発信機能になることですね。恐らく行政が、こういった文化イベントをやるというのは、何かそこにおらが町、我が県の情報発信ということを目指していると思うんですね。したがって、人と人をつなぐ、あるいはそこにしかないような情報が発信できるようなイベントは、どんどんやったらいい。先ほど辻村先生が言われたように、今年だけで大きな博覧会が、日本で一四、五あるのですね。まさに共倒れでして、あっちに行った人はこっちには行かないということになる。もっと地域の個性を出す必要があります。それと同時に文化庁が行っている国民文化祭の場合、まさにそういう文化と文化、人と人、地域と地域をつなぐという意味があるので、これは大いに盛大にやっていただきたい。また、移動芸術祭は、地域にいて優れた芸術に接する機会が少ない人に、機会を与えるという意味で、どんどんやっていただきたいと思いますね。

参加する文化活動

横瀬　次に、底辺を広げていくための参加する文化活動については、最近は顕著な動きがあると思います。合唱とか俳句とか、第九なんていうのもずいぶんありますね。単に鑑賞するというだけでなくて、住民が参加していくという新しい傾向で、何か顕著な例がございましたら、ちょっと教えていただきたいのですが。

小笠原　私も大阪の「一万人の第九の会」に参加しているんです。考えてみればおかしな話で、どうして年末になると第九ばかりやらなくちゃいけないかなと思うんですけれども、あれがまさに各地域で行われ、兵庫県の中でも、州本とか豊岡という、かなり離れた所でも「第九の会」というのができています。そういう所でみんなが練習して、その町でも第九をやるわけです。同時に関西地域の京都とか奈良とか大阪、神戸で第九を一生懸命やった人たちが、大阪城ホールに一万人集まってきて第九を歌う。行きますと、みんな終わったあとで、「よかった」と言ってますね。

辻村　具体的には、先ほど申し上げました磐田の疾風太郎物語ですが、一般市民が非常にたくさん参加しているわけですから、そのいい例だと思います。そういうものが出てくる社会的な背景と言うのは、人間が非常に疎外されて個々ばらばらな状況に置かれているからだと思うんですね。家族も非常に核家族化で縮小されておりますし、隣の人は何する人ぞというような形で、大都市の生活における疎外という問題が進行している。その不満が人間的な接触を求めて、こういうところに表れるのだろうと思いますね。



それからもう一つ、情報化が進み、どんどん情報過多になってきている。情報というのは間接接触なんですね。先ほどから羽衣の話でも、間接か直接かということを言ってきましたけれども、間接の情報によって刺激はされるわけですが、間接の接触ですと、どうしてもまだ不満が残ります。刺激されればされるほど直接に接触したいという欲求が出てくるのは当然だと思います。そのへんを第九というような形で連帯感が保障されれば盛り上がるんでしょうね。

光岡　熊本県でもそれはたくさんあります。どこにでも起こっている現象だと思います。私などは、地方独自のライフスタイルを追究しているリーダーがいないと、全国どこでも同じことをやるので、つまらないなと思います。全体の状況も踏まえながら、地方独自のことをよく知っている人がリーダーとして存在しないと、文化活動はいわゆる軽いカルチャーになってしまうのではないかという心配を花盛りであるがゆえに持ちますね。

優れた水準の芸術活動

横瀬　優れた指導者が必要だという観点と関連して、優れた水準にある芸術をみんなに見せて、それにならって文化活動が、さらに高い水準に上がっていくという側面もあるで

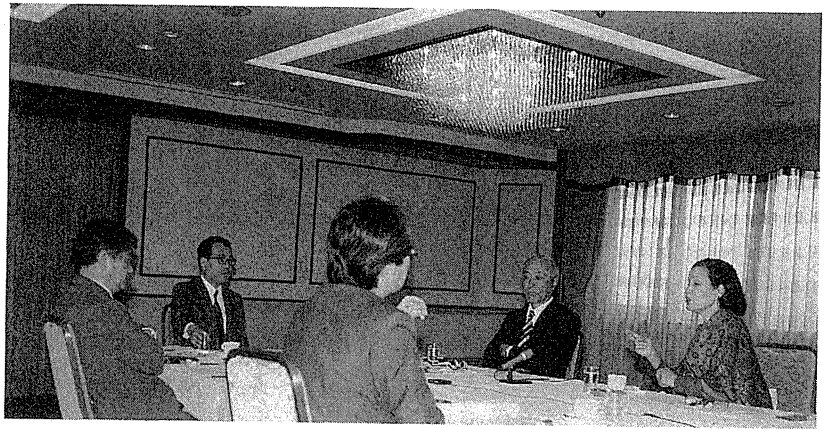
しょうね。とにかく、アマチュアの文化活動が促進されていく上で、プロの果たす役割は非常に大きいと思いますが、いかがでしょうか。

小笠原　本当に優れた芸術家の人たちが、単にパフォーマンスを見せるだけじゃなくて、人々をいろいろ指導するような形になっていくとすばらしいと思いますね。

横瀬　アマチュアにしては非常に高い水準にある文化活動というのも、結構あります。藤沢市民オペラは、例えばモーツァルトの「魔笛」を自分たちでやっているんですね。文化活動である限り高い水準を求めたくなる。求めたくなければ文化活動ではないんでしょうけれども。

松山　アマチュアの良さは熱気を感ずるところにありますね。すでにプロとアマチュアの境が無くなるほどの水準になっているんじゃないですか。

小笠原　私、実は実験をやってみたんです。プロのオペラ歌手と一緒にコンサートを、二回ぐらいやったことがあるんです。（笑い）非常におもしろいんですね。プロの人も「おもしろい。おもしろい」と言うんです。普通



のパフォーマンスは舞台の上で、観客を前にしてやっている。それはまさに一方通行になってしまう。私みたいなおっちょこちょいが一人入って一緒になって代わる代わるに歌ったり合唱したりする。そうするとものすごく観客が近くなる。最後は、みんなと一緒に歌を歌う。そういうアマとプロとの接触みたいなことは、非常に意味があるなという気がするんです。

横瀬　それから、プロの芸術活動が、地域的にずいぶん行われています。例えば、辻村先生の挙げていらっしゃる草津音楽祭とか富山県の利賀村の演劇フェスティバルは、それ自体はプロが行っているわけですね。けれども、非常に地域的な特色を持って、それが先ほどのイベントの持つ波及効果になって、利賀村とか草津町とかは非常に有名になり、活性化の効果があがってくるというような例も、ずいぶんあるようですね。

辻村　要するに文化活動の裾野が広がるという意味でアマチュア活動がたくさんあるのは大変結構だと思うんですけれども、やはり、アマチュアには限界があると思うんですね。本当に高度の技術は、やはり、プロには

かなわないだろうと思いますから。アマチュアも最後はプロになりたいというところがあるのではないでしょうか。今、草津の話が出たわけですけれども、群馬交響楽団が中心になっておりますが、群馬交響楽団は最初はアマだったわけですよ。アマではベートーベンは弾きこなせないということから、プロに転化した。プロに転化しますと、プロの地方オーケストラというのは、聴衆の数が限られますから、百万都市でないと経営が、まず無理なんですね。そこでどうしてもプロの地方活動になると、まさに公的な援助が必要になるわけです。そういうことで群馬交響楽団が財政的に苦しいものですから、それを長野、新潟、群馬の三県という広域で活用しようということから、関信越音楽協会というのを作りました。理事長は林健太郎さんにお願いしているわけですけれども、その関信越音楽協会が主催する音楽学校を草津に作ったわけです。世界的な大物を連れてきて二週間、個人レッスンをする音楽学校というわけです。それはただ音楽の技術を教わるというのではなくて、世界的な巨匠の人格にもふれるというところまでねらっているんです。生徒は草津で教育された技術をもって、最後に群馬交響楽団の中に交じり、クロージングコンサートをやる。だから草津で生まれている音楽文化というものは、東京のものを地方へ持って行くということではなくて、地方で初めて生まれたものを東京の人間にも提供し、逆流させようという意気込みでやっているんですね。

地域の国際交流

横瀬　最近、地方のレベルでかなり姉妹都市提携が行われています。それ以外にも、さきほど国際シンポジウムを行ったというお話もございましたし、地域レベルでの国際交流が、ずいぶん行われているわけでございます。このへんについていかがでしょうか。

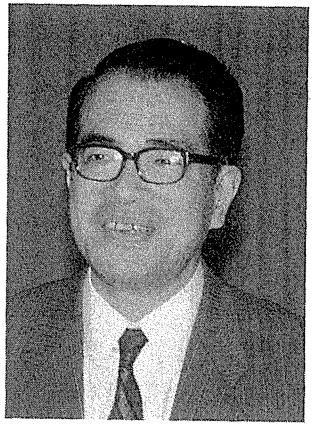
小笠原　今、地方自治体では姉妹州県とか姉妹都市とかが、ずいぶんできてきて、最初は儀礼的なことをやっているが、そのうちにそれぞれの芸術・文化を持って行くということが、最近非常に盛んになってきました。兵庫県の場合も、西オーストラリア州と提携していますので、例えば淡路の人形浄瑠璃をオーストラリアへ持って行ってやるとか、宝塚の歌劇をオーストラリアへ持って行こうかという話があります。そういう形でお互いの文化を知ってもらう機会を、これからもどんどん作っていったらよいと思います。どうせわからないだろうといって知らせないものが、ずいぶんあるわけですね。ところがちゃんと知らせたら、向こうだってわかるし、あるいは非常に違った文化というものに対して興味を示します。そういった意味で、国と国とのつきあいももちろん大事ですけれども、国と違って地方と地方とがつきあうことは、大変大事なことだと思います。今私は、日本の夜店をアメリカに持って行って見せてやろうということを企画しています。焼きトウモロコシやお好み焼き、竹トンボ、日本の凧などをアメリカに持ち出して、大学のキャンパスを借りて一日やるという形で、日本文化を一度輸出してみようという計画を立てています。そういうことにより、もっと日本人を外国人にわかってもらえるようになると思うんですね。

辻村　姉妹都市提携というのは、どういう必然性からやっているのか。私は現実の実態はあまり効果をあげてないのではないかとい

う気がするんです。もっとその都市の故事来歴を地元の方が勉強して、必然性のある相手と提携しなければだめだと思います。

光岡　熊本もたくさん、例えば中国や韓国あるいはアメリカあたりと県も市も姉妹提携を結んでおります。今、おっしゃいましたように、現実にはまだ効果を発揮していないなという感じを私も持ってます。西九州は、韓国とは古代においては同じ文化圏だったと言われているわけですから、そこらをもう少しきちっと踏まえた上で、提携あるいは文化交流をしていく必要があると思います。私は、国際交流というのは、多重な文化に属している意識ということだろうと思っているんです。例えばアメリカの文化に我々も属している、日本の文化に相手も属しているというところにまでいけば、本当の国際交流になるかと思うのですけれども、そこまではいっていない感じが、今のところしております。

松山　バレエと言うのは本当に国際用語みたいなものですから、そういう点では国際交流が、これからは非常に可能になると思うんです。ことしの八月下旬から九月にかけて、英国のエジンバラ祭というのがございますが、そこへ日本の創作の「曼陀羅」を持って参加するようになりました。「曼陀羅」は去年好評を得まして、芸術祭賞もいただきました。バレエというのは言語を必要としないし、人種とか地域の何のかんのという難しいこともないですから、これからもどんどん世界に羽ばたけるんじゃないかと思うんです。皆さんのご援助を得て、私たちは大いにやっていかなければいけないと思っています。



地域文化の発展

横瀬　今後の地域文化の発展への期待ということについて、まとめたいと思いますが、いかがでしょうか。

小笠原　東京一極集中、情報発信がほとんど東京だということになりますと、私は日本の地域で特色を持っている文化はだんだん消えていくのではないかという危惧を持っております。日本中どこを取っても金太郎飴みたいに同じ文化になってしまってはいけない。その意味で地域の個性化を、これからは大事にしていかないといけない。また、そういった個性の中から地域の情報発信がなされ、その視点に立って地方の文化開発がなされなければいけないという感じがしますね。

辻村　地方の活性化、多極化が必要だというのは、そのとおりですけれども、それはただ自由放任というか、レッセフェールではなかなか実現はしないと思うんですね。先ほども出ましたが、地方自治体も、非常に財政が苦しいといって、文化的なものにお金を出すという姿勢になかなかならないと思います。ですから何回地方の議会で否決されても、なお夢を追い続けてやりとげるというような一途な人間が出ないと、だめじゃないかと思うんですね。一見非常識なリーダーが出ないと、ただ口先で言ってもなかなか実現しないというふうに思います。

松山　うちの団長などは、松山・森下・清水哲と三代続けてそうだと言っています。(笑い)非常識なリーダーたちがバレエに惚れて惚れ抜いているのですね。確かに頭(かしら)に立つ人の問題ですね。それはどの社会にも言えることではないかと思うんですね。地方でもそういうプロデューサーなり、イベントを行うそういう一人のリーダーが大事だということですね。

光岡　地域文化というときには、地域も文化も観念的に考えると、極めて複合した概念だろうと思うんですね。しかし、地域というのはどこかに存在するので、私たち熊本県でも八つぐらいの地域をばっと考えられるんですね。定住圏構想とかいろいろなことで考えているんでしょうけれども、そこに切り込んでいくのは行政の一番の手段だろうと思います。

それから、地域文化と言うときの文化は、道徳、芸術、思想といった狭い意味の文化じゃなくて生活そのものだろうというふうに私は考えます。ですから、今までの行政による文化の扱い方ではいけないだろうと思います。もう少し幅広い文化概念というものを持って、行政が当たってほしいと思います。

それから、熊本県では細川知事の発案で肥後学研究所というのを、いま構想中です。いまの熊本の文化の骨格を作っているのは何だというようなことを、歴史的にきちんと調べ、いまの町づくり、村おこしが、ともすると一過性のものになりがちなので、きちんとしたデータを確保していこうという発想で、地域文化研究所みたいなものを考えております。地道な作業ですけれども、そういうこともやっていかないといけないのではないでしょうか。

文化庁への期待

横瀬　どうもありがとうございました。最後に文化庁へのご要望についてお願いします。

小笠原　歴史的に考えてみますと、芸術、文化には、いつでもちゃんとパトロンがあったわけですね。例えば、大阪の町人文化は、町の旦那衆が、自分が義太夫や清元をうなり、番頭にも習わせ、小僧さんにもちょっとやれというかたちで伸びてきている。ヨーロッパを考えても、ハプスブルク家とか、そういった王朝がいつもパトロンになって、音楽家とか文化芸術団体などを維持していた。一体今、日本のパトロンは誰だろうと思ったら、第一義的にはやはり国だろうし、地方公共団体だろうと思うのですね。ところがこれがどっちもまさに零細補助ですね。芸術家が食べていけないわけです。私は声学の団体の方々とつき合っているんですけれども、彼らが公演をするときの一番の苦労は結局切符を売ることなんですね。大体自分のところのお弟子さんとか、あるいはこの前あの先生のを一〇枚買ったから、今度はあの先生に一〇枚買ってもらおう式の切符の売り方が少なくないですね。そして、最後に残った切符は全部その人が抱え込む。相当大きな出費をしながらやっているという実態を見てしまうわけです。例えば、ウィーンオペラなどは、みんな政府関係が相当に援助をしているわけですね。要するに、彼らが切符を売って赤字を全部背負い込むような状態を、まずなくしてい

ただきたい。国ではとても全部はかぶれないというならば、企業の文化振興についての社会的責任もあると思うんですね。確かにこのごろ冠コンサートとか、音楽団体に対する賛助会員とかいう形でずいぶん援助してはくれているのですが、まだ足りない。文化庁を通じて、少なくとも一部上場企業は必ず文化に対して寄付をするという雰囲気を作っていただきたいと思います。

辻村　私は小笠原先生と全く同じ考え方です。文化庁の補助金が年々減ってるんですね。まさに経済がこれだけ発展して金が余っているんですから、政府の中で「文化のほうに回せ」という形で、大いに予算を充実していただきたいと思います。特に、地方の文化団体への補助金は増やしこそすれ、減らすなんていうことはやめていただきたいと思うんですね。

その場合に、政令指定都市は人口一〇〇万以上あるわけですからプロの芸術団体もやっていけるわけですが、それ以外の都市は非常に苦しいわけです。政令指定都市以外の所を、重点的にご考慮をいただけないかという気がしております。

松山　このたびのエジンバラ公演は、文化庁と民間企業がバレエ団を支えて送り出す「芸術活動の特別推進」という新しい方針に基づくものですばらしいことです。文化に対する助成金については、もっともっと出していただきたいと思います。今、小笠原先生がおっしゃったようなことは、バレエ界にもたくさんあるのです。いろいろ助成していただいていますが、精いっぱいなんです。無駄な使い方もあるかもしれませんけれども、オペラ、バレエというのはぜいたくなものなんです。まだ、オペラ、バレエ劇場もございませんしね。地方にはいい舞台ができておりますけれども、東京都には人口にくらべて劇場が少ないのです。現代舞台芸術のための劇場を作っていただくことを一日も早く実現していただきたいですね。それから、国が認めた文化的事業に対して、民間企業が援助したときには、無税扱いにしてもらいたいのです。この点の税制改革を私は、声を大にして申し上げたいと思っております。

光岡　「温かい褒め言葉より、冷たい現金」ということが、昔からありまして。（笑い）熊本のような地方にいて一番考えますことは、いま地域文化関連の仕事を扱う部局が、知事部局で多くできつつあります。教育委員会ではそれに対応できなくなっている面が猛烈にあります。そのために文化的な視野を持った行政マンを育てていただきたいということです。それと知事部局でのそういう組織をきちんと体系づけていただきたい。そのために文化振興法のような基本的な法律を作っていただいて、全都道府県に示していただきたい。そうでないと、いまのところみんな地方公共団体だけで考えているというところがあると思うのです。文化庁でぜひこの二つのことをやっていただけたらと思います。

小笠原　教育というのは基本的にチャージであり、文化というのはディスチャージなんですね。教育で得たものを外に出す。だから、方向が逆なわけです。いま教育委員会が文化を担当するのはだんだん難しくなってきているというのは、まさに方向が逆の人が文化を担当すると、どうしても何とか講座とか何とか教室になっちゃうわけです。そうではない面をできる人が本当に必要なんですね。

それと地方公共団体の持っているホールですが、その使い方が夜はある時間になったら締めなくてはいけないことになっています。だから、九時まぎわにアンコールの拍手が鳴りやまなくても、「時間がないからおしまい」と言うことになります。ヨーロッパなどのオペラに行きますと、幕間にワインでも飲んでちょっとスナックでもということがあるのですが、公的なホールはたいていお酒を出したらいけないことになっており、食べる所は時間になったら締めてしまう。だから、芸術とともにもう一つの楽しみというのがありません。このへんは、もう少し柔らかい配慮が必要ではないかという気がします。

松山　文化というのは遊びが大いに入ってよろしいんですよね。ゆとりがあるということが大事な要素ですから。

横瀬　ただいまいただきましたいろいろなご意見などは、文化庁に対するおしかり、お励ましと受けとめ、文化庁としても大いに頑張ってまいりたいと思っております。きょうはどうもお忙しい中を御出席いただきましてありがとうございました。

次号目次

特集　これからの海外子女教育

巻頭論文

我が国の国際化と海外子女教育　柏木　雄介

座談会

これからの海外子女教育・帰国子女教育

（出席者）岡田真樹子／木暮　浩明

小林　将／福島　清治

（司会）中西　釧治

論文

帰国子女の日本語力　小野　博

随想

異文化と子供　中津　燎子

事例紹介

シンガポール日本人学校

ウエリントン補習授業校

立教英国学院

兵庫県西宮市

現地ルポ

神奈川県横浜市立港中学校

編集後記

▽日本人は文化好きである――。先日、ある雑誌にこのような評論が載っていた。ただし、この意味は我々の生活の中に文化という言葉がいかに多用されているか、という点を指摘したものだった。例えば、終戦直後の世相からは「文化住宅」を筆頭に「文化鍋」、「文化たわし」と呼ばれるものまで現れたそうだ。

▽これらの言葉を、本来の文化の意味として捕らえるには異論もあろうが、荒廃した国土の復興に燃える人々の生活の中から生まれた新しく便利なものに「文化」を冠して呼称した訳であるから、ある意味ではその時代の活気と意気込みを感じ取ることができる。

▽現在はまさに「文化の時代」と言われるように、終戦直後の状況とは違った舞台で文化というものが脚光を浴びている。そして、こうした背景の下、文化庁が誕生して満二〇年を迎えた。行政としての文化には、一定の枠組みがあるだろう。しかし、物心両面にわたって国民生活の充実を目指す今こそ、文化行政の果たす役割には大きな期待がかかっていると言えるだろう。

（政策課）

MESC　61　月刊　「文部時報」　6　月　号　第1337号

著作権所有　文部省　昭和63年6月10日　印刷　昭和63年6月10日　発行

発行所　株式会社ぎょうせい

本　社　東京都中央区銀座7丁目4番12号（郵便番号　104）

（営業所）東京都新宿区西五軒町52番地（郵便番号　162）

電話　東京（268）2141（代表）

振替口座　東京9－161番

印刷所　株式会社行政学会印刷所

定価300円　（〒50円）

年間購読料3600円　（〒共）

・ただし，増大号，臨時号の場合は別に代金を申し受けます

・なお，購読のお申し込みは直接営業所またはもよりの書店にお願いします